

服飾デザインの基礎理念

梶 川 正 男

The Fundamental Ideology about Costume Design By Masao Kazikawa

1. はじめに

服飾デザインは、人間が其の衣を着用する事に依つて、「人間」をより一層機能的に、又より一層美しくする為になされるもの、つまり人間生活をより幸福に、楽しくする為になされるものであるから、服飾デザインを研究する為に、先ず第一になされなければならないのは、その主体である「人間」の研究である。

被服構成並に被服材料の研究も人間を土台として、人間の営む生活を中心としてなされなければ被服の本質は破壊される。元来、人間なるものは、非常に美しいもので、純裸なる人間は神に等しく、又純裸なる人体は極めて美しいが、人間は其の生活を営むとなると、人間性の弱点が色々の形で表われて来て、醜くなるものである。従つて裸体絵画や、裸体彫刻には、より神聖な、より高い美を感じ乍ら、風俗画となるとそれは、一段低いと考えられて来た。同じく人間生活に最も密接な関係にある衣服も芸術史では、あまり重く扱われなかつた。衣服には低俗な人間的くさゝがつき易いと考えられて来たのだ。例えば衣・食・住を中心とした人間のならわしを風俗と言うが、俗とは、いやしいと言うことであり、智徳高き人の反対を俗人と言う。「俗」はもともと人間のならわしのことで、いやしいと言う事ではないのだが、人間生活は、人間をいやしくしやすいので、「俗」と言う言葉に「いやしい」と言う意味と感覚がつきまといつて来たのだ。「坊主憎けりや袈裟を憎い」と言う諺があるが、是も衣服には、人間と言うものが如何に深くにじみ込んでいるかを示す好例である。人間は此の様に「人間臭さ」を嫌悪しつつも、人間臭い社会で生きている。人間と言うものは、人間臭くない所では、とても生きられない動物であるからだ。

人間は人間を憎み、又人間を愛し、恋慕うものである。衣服を着用している人間は裸体の時よりも最も人間的であり、人間的である為に醜くもあり、美しくもあるから、其の醜さを取り除き、より美しく、より好ましいものにする為に、服飾デザインの研究が必要となつて来るのである。従つて服飾デザインの基礎としての人間研究に就て、此処に述べて見たいと思うが、其の人間研究の対象として二つの面がある。其の一つは「人間的」と言うものの本質に就て、もう一つは「人体」に就てである。此処では上記二問題にしばつた為、被服構成、工作、材料、衛生、其他実利上の問題には、直接、具体的には触れないで「服飾美」に重点を置いた。

2. 「人間的」と言う事に就て

イソップの物語を読むと、色々の動物が出て来て、互に騙したり、騙されたり、醜い慾望の為にかえつて失敗をしたり、あたかも我々人間共の世界で、人間達がしている様な事を行っている

。是は一種の擬人的偶話であるが、あたかも我々人間を、動物を鏡にして眺めて見る恰好である。して見ると人間と言うものは、この様に醜いものであり、此の様な醜さが人間らしさなのであろうか。

人間の持つている欲望、例えば、性欲、物欲、名誉欲と言つた種類の欲望は、人間本能の中でも特に強烈なものであるから、かゝる欲望が元になつて、騙したり、騙されたり、人を押しのけたり、闘争したりするのである。けだし是は人間の弱点であり、此の弱点が常に露呈され易いものだから、此の弱点をもつて「人間的」とであると言う見方が生じて来るのである。性欲、物欲、名誉欲と言つたものゝ一連として、真欲、善欲、美欲を挙げなければならないが、是は高等な欲望とされ、神の如き信念と理性と意志がなければ達成出来ない欲望、弱い人間性を克服しなければ、到達出来ないものと考えられて来た。即ち、人間を解脱する事に依つて達し得るものとされて来たが、かゝる高等な欲望も、決して神のものではなく、我々人間のものであり、性、物、名誉欲と言ひ、真、善、美欲と言ひ、畢竟、是は人間欲として一連のものであり、真、善、美欲と言つても、性、物、名誉欲を全く無視しては、是等の美しい開花は望み得ないのである。即ち、人間らしさの無い人間の美しさ、好ましさ、正しさは無いのである。衣服こそはかゝる人間性と最も密接な関係にあるものである。人間の弱点と結びつき易いのも衣であるが即ち衣に依つて人間はいやしくもなるが、衣に依つて人間らしさをより高尚に、又美しく導いて行く事も出来る。女性は衣服を着用することに依つて、裸体の時よりも煽情的となりやすい、何故そうなるかは、心理学上の問題であるが、此処では其の説明を省く、古来あらゆる意味に於ける性的罪惡は裸体でなく衣服を媒介としている。性は罪惡に導き易いものだから、人間性の弱みは、ともすれば性に関することをけがらわしいものと感じさせ、其のけがらわしさは裸体よりも、衣を通じて表われる。

けだし、エロチックの本拠は、勿論肉体そのものにあるが、良風美俗を害すると言つた問題は、常に衣にかゝっている。従つて衣が裸体よりも性を不自然に強調する心理的作用があるからと言つて性を否定してより機能的で、より美しい衣を望み得べくもない。例えば、婦人服に於ては、女性の女性らしい美しさは何処にあるかを知れば、ほのぼのとした性の魅力を表わさない婦人服は、決して美しくないと言うことを了解出来よう。要は衣をデザインし、是を作り、着用し、更にはそれを見る人の「心」の問題である。真欲、善欲、美欲の裏付けの無い性欲は、

醜と惡に通ずる。此の点をよく心得て、性をより美しく表現することに努力すれば、性は、美の障害とならないばかりか、それある為に、衣は一層美しく、生き生きと、清純な人間の喜びを表わすのである。

物欲、名誉欲と言ひ、是を全く否定したのでは、服飾の意義はなくなる。衣の発生に防寒、防暑説を唱えた人もあるけれど、総て動物の体は自然に順応する様に出来ているので、人間に服飾を求める気持ちが無かつたら、他の動物の様に決して衣を考えつかなくなつたであろう、結局、人間は裝飾の為ではあるが衣を着る様になつたので、衣無くしては寒暑を防ぎ得なくなつ

たとえるのが正しい。例えば、羞恥説にしたつてそうである、カーライルもその著「衣服哲学」で「衣服は羞恥に依つて着用する様になつたのでは無い。装飾だけを目的としたのだ」と言つて羞恥説を否定している。

アダムとイヴが、蛇にそゝのかされて林檎を食べたら、それは智慧の実であつて、幸か不幸か、智慧がついたばかりに、遂に樂園を追われて、ひたひたに汗して働かねばならない様になりそれから人間の苦しみが始まつた。更に樂園では裸であつた二人に羞恥心が出来て裸でいられなくなつたと、キリスト教の聖書に説かれているが、此の二人が智慧の実を食べた事は、恐らく裸であつた二人が、何かのはずみで、装飾を思い立ち、無花果の葉か、何かの葉を身に附けたのが始まりで衣生活をする様になつた。其の時から人間に智慧が附いたと見るべきである。誠に衣は人間に智慧をさずけ、性に対する羞恥が出来、物欲、名誉欲と言つた人間的欲望が此の時から起り、鳥は時かず、耕やさゞれど、何の心配もなく空に喜々として生きているのに、人間だけは、何を思い思ふかと、キリストが言つている様に、現実、人間は朝から晩迄パンの為に働き、物欲、名誉欲のとりことなつて、醜くゝ争い、人を押しのけ、もろもろの罪惡を身に負わなければならなくなつたのだ。是は一種のキリスト教神話とのみ看過出来ない。此の神話は我々人類に深い示唆を投げている。

人間の歴史が始まると、衣は職業や身分の標識として用いられるようになった。特に封建時代には、士農工商がそれに依つてはつきり示された。例えば、西洋に於ても、王侯、貴族、僧侶、士分、と言う身分の高下によつて、布質、形、色等が定められ、庶民に於て、上等の衣を纏えば罪せられる定め迄作られていた。日本に於ても、町人は綿服に限られ、絹物は着用出来なかつた。しかし現代に於ても、かゝる規定や、習慣がなくなつたとは言えない。特に官吏の或役柄に於ては、それは厳として存在し、軍隊を持つ諸国に於ては、肩に附く星一つでも其の人の地位に大きな関係がある。それは職務の上で、命令系統其の他に、多大の便益があるから止むを得ないとしても、それが其の人の名誉に大いに関係があるとしたら、それは、いたづらな名誉心の助長となる。あくなき人間の名誉心は益々衣の上にそれが表われることを望む様になる。位階に関して制定されたものばかりで無く、もろもろの名誉、身分、富を衣の上に色々な形で表わそうとする様になれば、被服の本質は其処に失われ、衣は虚飾の道具となり、人間の醜さは露骨に表われ、益々汚らしいものとなる。

一切の欲を捨て、生まれ乍らの人間にかえる事を「裸になる」と言い、或欲の為に自分を自分以外の者に、或は自分をより優れたものに見せる事を「装おう」と言い、人を欺く為に巧言する事を「歯に衣着せる」と言う言葉が昔からある。それはイソップ物語に表われる様な人間的欺瞞は常々衣に関して連想されかゝる言葉が出来たと見てよい。だからと言つて、今更我々は裸でいられたエデンの園に帰る訳にもいかず、衣にまつわる人間的苦しみと、醜さの世界に生きていなければならない。そうとわかつたら、かゝる人間を、かゝる人間の儘で、幸福に、美しくする方法を考えなければならない。それには人間が、既に衣から離れられなくなつてい

限り、衣の発生当初の装飾本能、人間自ら美しくあり度しと思う清純な心になる様な環境を常に作るように心掛けなければならない。

服飾デザインは此処から出発するのである。

以上で私は、先ず、衣と人間性との関係を述べた。

次に衣と人体との関係を、特に服飾に就いて述べよう。

3. 服飾に於ける衣と人体との関係

服飾には、人体を補正美化するものと、人体美を強張するものとある。始め、原始人達は、裸のままでは何となくさびしいと思つて、何かの葉でもちよつと体に附けて見た事だろう。是は最も単純な人体の補正美化である。和服に於て、臀部の大きいのを帯の太鼓でかくしたり、洋服の場合でも、頸の欠点を襟の形の大きさや、襟ぐりの深さや、形によつて補正美化する、或は太つた人が和服の場合はたて縞に依つて、反対に洋服の場合は、よこ縞に依つてすらりと見せる等も補正美化である。

人体の美しさを強張する服飾の例としては、古代ギリシヤに先立つクレタに於ける婦人服を先ず挙げるが、それは乳房を露出させ、尚ウエストをしめて、腰の美を強張したものであつた。古代ギリシヤに於ては、人間の形と心とが、全く一元的に考えられていた為、人間の形の美しさが、即ち「善」であり、それは神に通ずるものであると考えられていた為、肉体美が礼讃された結果、肉体美を破壊しない様な衣が用いられた。即ち、ヘプロスにしても、キトンにしても始めからきまつた形が無く、しなやかで薄い布を用い、それを着した場合、体の儘に形があらわれ、又襷が出来て、少しも補正する所が無い。又近代に於ても、体にぴつたりした服装に於ては、肉体美が其の儘、服飾美にあらわれているものがある。和服に於て、腰紐で腰の美しさを強張するのも、その一例である。

人体を補正美化する服飾にしても、人体美を強張する服飾にしても、いづれも人体美に理想が向けられている事に間違いは無い。所が人体美を忘れて服飾の為の服飾となつて来ると種々の誤りや、弊害が起きて来る。例えば、和服に於て、胸高に帯を締めて、胸部を圧迫したり、洋服に於ても、コルセットでウエストを極端に締めつけて、所謂蜂腰にした為に、骨格の変形を来したりすることは、極めて不自然で、その弊害も大きい。

人体の持つ自然美を、其の儘表わすには勿論、裸体に限る。しかし人間が生活する上に、少くも原始生活でない限りは衣が必要になつて現在に至つてに就いては前述で明らかである。従つて衣を用いることは極めて人間的で、生活形式上、他の動物との唯一の相異である。衣を自由にぬいだり、着たりすることの出来るのは人間だけである。従つて、衣を用いなければならないとしても、古代ギリシヤ人の様に、人体の形を少しも変形する事なく表わせば勿論前述の様な人体上の弊害を及ぼす事はない。しかし此の場合、着衣美は裸体美には及ばない、従つて古代ギリシヤ人にとつて着衣は美しくなる為のものでなく、服飾美以外の生活目的の為

であつたから、美しく見せる必要のある時は、直ちに衣を脱した。（しかし、古代ギリシヤ人の服装は、他のいつの時代のものと比較しても一段と立ち勝つた美しさがあつた。）古代ギリシヤに於ては、美しき肉体に、誠実、善良な精神が宿ると考え、肉体美を礼讃し、衣服に余り重要な意義を認め無かつたので、ギリシヤ哲学に於ても衣服美を取上げなかつた。従つて十九世紀の初めにカーライルが「衣服哲学」を公刊する迄は、衣服に就て学問的に論じた書物はどの国にも、殆んど無かつた。唯、服装史、風俗史の類があつたのみである。

衣を用いるにあつて、裸の場合よりも、着衣の方が醜くゝなつたとしたら、服飾の点ではマイナスである。所が実際にはそう言う事実の方が多い。服飾は人体を飾ろうとする人間本能の表われであるから、衣を着することに依つて少しでも美しくなろうと努力する。かかる努力が前述の様な服飾の為の服飾となり、更にそれが度を越すと服飾過剰となり終る事が多い。

其のよい例が、フランスのロココ時代である。ルイ王朝の享楽と放縦の生活は華麗廢頹的な服飾を生んだ。それは馬鹿げた反自然的なもので、フープを用いて恐ろしく広げたスカートは人体の美しさを全く押しかくしたばかりでなく、人民達を高税で苦しめた。ルイ十六世に至つて、其の王妃マリー・アントワネットは服飾界に於て、常に其の流行のさきがけをなし、リボン、羽根、造花、麦稈、レース、紗などで飾り立てた馬鹿々々しく大きなかつらを戴せた頭は遂に其の重みに耐えかねて、フランス革命により、断頭台の露と消えた、これなどは、服飾過剰の喜劇と悲劇をまざまざと物語つており、自然無視の人間の傲慢に対する天の懲罰の恐しさを人間に示している。

先に述べた様に自然の人体美は確かに服飾の基本である。しかし乍ら、人体美だけを礼讃していたのでは服飾の意義がなく、従つて服飾デザインの必要はなくなる。其処で服飾美は人体美に劣ると言つて諦めていないで、更に服飾の為の服飾に堕さない様に心掛けつゝ、服飾デザインの在り方を考えなければならない。

思うに、人間はイメージの動物であるから人体美の上に更に服飾に関するイメージを持つものである。つまり人間の個性や、教養や美的感覚の洗煉が、人体美の上に更に理想美をプラスし度くなつて来る。即ち、自然的人体美だけでは、人間の教養にとつては単調だからである。又、若し、或人の体が肥り過ぎ、痩せ過ぎ、胴が長過ぎる、短か過ぎる、首が太い、又は長い、等々の場合には、尚更、服飾に依つて、補正美化し度いと思うだろう。其処で服飾の意義と価値は、其のデザインに依つて、人体の上に更に何ものかをプラスし、人間のイメージを満足させるにある。と言うことが了解出来るだろう。従つて、より優れたイメージは、よりすぐれたデザインを生むものだから、デザイナーたるものは、常によきイメージを培う様に努力しなければならない。

イメージは、対象に接した時、つまり靈感を湧きおこすきつけを得た時に結ばれる。その対象なるものは、心の外にある場合と、内にある場合とある。しかしそれが例え内にある場合でも、其の源を探れば、外から受けたものである。つまり、かつて見たもの、聞いた事、読ん

だ事が、潜在意識として、心に留まっていたものが、一つの契機を得て、忽然として、靈感に触れるものである。従つて、デザイナーは、此の靈感に依つて美しいイメージを画くのであるから、すぐれたデザイナーが忽然として心に浮べたアイデアも一日にしてなつたものではない

よきデザインをする為には、常にものをよく見、聞き、考え、服飾美の基礎である人体美に関しては、常にクロッキー、デッサン等でよく勉強する。即ち、それに依つて、人体美の理想が感覚的に培われるのである。美術解剖等の研究に依つては、知的に人体を把握して、イメージの助けとする。

衣の材料である布地、其の他に就ては、其の質を研究し、其の感覚、感情に触れるなどして、絶えず美しいイメージを持ち得る様な環境に自分を置く様に心掛けなければならない。

我々が常日頃、人体の研究をしているとしても、それが其の儘、解剖学的に頭に残されるものではない。我々は人体美に就て感覚を養うのであるから、常によく人体を見ていれば、それは忘れ去つてもいいものである、実は忘れ去ることこそよき消化で、不消化のまゝ残つている記憶は、どうしても純粋な美しいイメージを結ぶのに障りとなり易い、純粋な美しいイメージとは、生き生きとした姿を心に書き出すことである。其の様にイメージは一つの生命体であるから決して固定していない。イメージは瞬時にあらわれ、瞬時に消え易い。それ故、イメージが表われたら、それを直ちに記録し、固着して残さなければならない。其の為に、デザイナーは、いつもスケッチブックを用意し、常住坐臥、スタイルの事に心を置き、常に油断の無い様にし度いものである。

4. む す び

結局、服飾デザインは、あく迄、人間美と人体美に基礎を置くべきで、衣の為に人間及び人体を誤つたり、又衣の為の人間及び人体としない様に心掛けるべきである。

カーライルは「衣服は、我等を人間とせり、然して、今やまた、我等をして衣桁たらしめんとするの虞あり。」と警告している。(1956. 12. 16)

参 考 文 献

新 渡 戸 稲 造 講 演 高 木 八 尺 編	カーライル	「衣服哲学」
山 崎 勝 弘	被服美学	
青 木 良 吉	図説 西洋服飾史要	
太 田 三 郎	裸体の俗と其の芸術	